

16 澁江長伯が蝦夷地で採集した

植物標本について

山岸 喬

寛政十一年（一七九九年）に澁江長伯ら一行三十四人が幕府の命をもって、松前からエリモを通って、厚岸までの太平洋岸側を百四十二日間かけて、本格的に植物の調査を行った。このとき、澁江長伯、土岐新甫、谷元旦などが、多くの紀行記、図譜、植物標本を残した。このときの紀行記、図譜、写本などについては多くの人により研究されている。しかし、この時に採集された植物標本については、明治時代、帝室博物館にあつたものを、植物分類学者の牧野富太郎博士から、北海道大学の宮部金吾博士に渡され、現在、北海道大学農学部図書館に保管されているが、まだ詳細な調査はされていない。

宮部博士は、この標本を裏打ちして、大切に保管し、調査していたが、その内容についてはほとんど発表され

ていない。現在、宮部文庫とよばれる資料には、この標本（宮部博士が新たに書き込んだラベルつき）、ノート類があり、宮部博士の調査の一部を知ることができる。宮部博士は生前、この標本のデータと、谷元旦の写生図、『東夷物産志』と合わせ考えると、すっかり一致していると、述べており、澁江長伯らが採集した植物であることに、確信を持っていた。

この植物標本は、蝦夷地のもので、現存する最も古いという骨董的価値があるだけでなく、学術的な価値があると思われる。まず、百九十七年前に採集した同一種の植物が、同じ地域に現在も野生しているのかどうか、二百ヶ所以上の風景画に描かれている山、川、海はどう変化したか、この二百年間の環境の変化を調べるのに、よい指標になると考える。

また、標本に書き込まれたアイヌ語名は、アイヌ民族の江戸時代における植物の呼び方を知るために最も貴重なものである。アイヌ語の植物名については、蝦夷地に関するいろいろな書物に、よく知られた代表的なものだけが、散見されるが、残念なことに聞き取りしている人

が植物の知識が十分でなく、和名が正確でないものが多い、このように標本が現存していることは、その信頼度は極めて高く、アイヌ語研究にとつても最も貴重な資料である。また、谷元旦の日誌中に、旅行中はアイヌの通訳を連れていることが記されており、アイヌからの聞き取はしつかりしたものであつたことがうかがえる。

この採薬使の植物に関する調査の結果は、谷元旦の『蝦夷採薬草本図』に二百五十四種、土岐新甫の『東夷物産志』に四百八十五種の動植物、鉱物が記録されている。

宮部文庫に残っている植物標本は二十二冊で和綴じにされている。もともとの標本は四十二冊(三十一冊ともいわれる)とされているが、宮部博士が再装幀したときに、二十二冊になった可能性もある。一冊に十八種、つづの標本が綴じられ、各標本ごとに、採集場所、採集年月日、アイヌ語名が書き込まれている。しかし、一部は虫食いなどで欠落しているが、ほぼ全種類について種の同定が可能である。

今回はこの標本を現在の植物分類学から、再度調査し、種名を明らかにし、江戸時代の植物名、宮部博士の時代

と、現在の植物名を比較したので報告する。

(北見工業大学)